

日本語と韓国語の同形二字漢字語の 形態統語的類似性と相違性に関するコーパス研究

朴 善嫻

1. はじめに

日本語と韓国語は、文法・語彙など言語類型的に非常に類似している。その中でも、漢字語の比率は、両言語で 7 割を占めるほど高く、日常で頻繁に使用されていることが挙げられる(Yokosawa&Umeda,1982;李,2002)。これらの漢字語が同じ音韻である場合や、同様の意味である場合は、両言語の間に相互対応関係が成立し、直訳しそのまま使用することが可能である。また、漢字語の中でも二字漢字語の使用率は非常に高く、それらに関連する文法項目においては、高い類似性が見られる。それは漢字語の名詞に、ある特定の語尾を付けることで、名詞を動詞化および形容詞化して使うことができるという点である。そのため、梅田(1979)では韓国人学習者が母語の言語的特性を適用する場合に生じる誤用について、次のように述べている。「K(韓国語)の文の構造は、J(日本語)の場合と平行的に考えて殆どさしつかえない。文はその構造によっていくつかの類型に分類できるが、その類型のたて方は基本的には全く同じといつてよく、文の構成正文になる名詞節・述語節・副詞節などの構造も日本語と非常に類似点が多い。しかし、微細な点ではやはり両言語で異なる点も多く、韓国人学習者の日本語学習に際して注意すべき若干の点を指摘する。」また、「韓国語では漢語の名詞を用言化する場合に、その漢字語が動詞的な意味を持っていたとしても形容詞的な意味を持っていたとしてもすべて-suru を付加してサ変動詞として、形容詞的意味の名詞は-da を付加して形容詞として使うことに注意をする必要がある。」と述べられている。特に漢字語

の場合は、同形でも意味に微妙な違いがある場合は、その違いに気づかず韓国語の漢字語をそのまま使い、誤用が起きる傾向があると考えられる。

そこで本研究では、両言語の間に共通する二字漢字語に付加される語尾に着目した。具体的な内容は次の二点である。第一に、このような二字漢字語に日本語では *-suru* が付き動詞としてしか使用されないが、*-suru* に当てはまる韓国語の *-hada* は動詞にも形容詞にもなるため、動詞および形容詞の品詞を確認し区別する必要がある。第二に、韓国語では二字漢字語を動詞として *-hada* や *-doeda* を付加してよく使われている点も考慮し、それらの語の計量的な占有率を検討することが必要であると考えられる。最終的には、韓国人日本語学習者に対する日韓類似漢字語と相違漢字語の情報を利用した有効な学習案を提示したい。その一貫として、二字漢字語の形態的な特徴を検討するために、二字漢字語を計量的に集計した。これらの集計の結果から、日韓二字漢字語に付加される語尾の特徴が、両言語においてどのような類似性や相違性を導き出せるかを検討する。また、抽出した日本語の二字漢字語を品詞別に分類し、それに対応する韓国語の漢字語においても品詞や語尾特性(能動態/受動態)による分類を行う。

2. 研究の背景－日韓両言語における類似した漢字語

現代の韓国語の文字は漢字表記ではないが、上述したように韓国語の語彙のうち、一文字でも漢字が含まれている語の割合は、69%にのぼる(李,2002)。韓国語の語構成は、漢字のみからなる語だけではなく、一文字からなる漢字語を始め「固有語＋漢字語」、「漢字語＋外来語」、「固有語＋外来語」、「固有語＋漢字語＋外来語」からなる語も存在している。そのため韓国語における漢字語の占有率は非常に高いと言えよう。これらの漢字語のうち、特に二字漢字語の場合は日本語のそれと語彙的・文法的な特性が非常に類似している。例えば、表1に示したように、まず日本語では、「大学」の場合は名詞のみで使用されている。一方、「食事」の場合は名詞として使われたり、「食事」の直後に動詞化する語尾を付加して動詞としても使われたりするように、両品詞で使われている。同様に、韓国語でも「大学」は名詞のみで使われ、「食事」は名詞で使われるか動詞化する語尾を付加し、動詞として使うことができる。このように、名詞のみで使われる漢字語や動詞として使われる漢字語は、一対一で対応関係が成立しているため正の転移が起これと考えられる。

表 1 日韓共通した二字漢字語

品詞	二字漢字語	日本語	韓国語
名詞	「大学」	名詞のみで使用 「大学」[daigaku]	名詞のみで使用 「大学」[daehag]
		名詞として使用 「食事」[syokuzi]	名詞として使用 「食事」[sigsa]
動詞	「食事」	-suru が付加され動詞としても使用 「食事する」[syokuzi-suru]	-hada 付加で動詞としても使用 「食事하다」[sigsa-hada]

[]は、漢字語の音読.

一方、表1のように日韓に共通した部分だけではなく、表2のように相違しているところもある。例えば、「曖昧」のような形容詞は、形容詞を表す語尾が付き形容詞として使用される際に、両言語には違いが生じる。表2から分かるように、日本語の形容詞には *-na* が付加される一方、韓国語では動詞と同様に形容詞にも *-hada* が付加される。このように、両言語の間では形容詞の語尾が対応していないため、韓国人日本語学習者には誤用が起きる傾向がある部分であると考えられる。つまり、韓国語で動詞と形容詞の語尾が同じであることが日本語の形容詞の語尾使用においても影響を及ぼしていると言えよう。

また、両言語間で二字漢字語が動詞である場合は、受動態が可能か否かという態の問題にも相違点が現れる。両言語共に同様の動詞であるが、態におけるずれがあり、これも韓国人日本語学習者にとって混乱が生じ誤用が起きる可能性がある。例えば、日本語では「矛盾」に *-suru* を付加し、「矛盾する」と能動態で使用されているが、韓国語では「矛盾(모순/mosun/)」には *-hada*(能動態)ではなく *-doeda*(受動態)が付加される。そのため、韓国人日本語学習者は「*矛盾される」という誤用が起きる傾向がある。さらにもう一つの相違点として、韓国語では *-hada* が付加し動詞として使われている漢字語が日本語では名詞のみで使われる語がある。例えば、「参考」の場合、韓国語では「参考(참고/chamgo/)」に *-hada* が付けられるため、「*参考する」¹のような誤用が見られる。

¹ 『岩波国語辞典』(第六版)では、「参考」が〔名・ス他〕と記述されている。

表 2 日韓相違の二字漢字語

二字漢字語		日本語	韓国語
品詞		- <i>na</i> (- <i>da</i>)が付加され, 形容詞	- <i>hada</i> が付加され, 形容詞
	「曖昧」	「曖昧な」 (「曖昧だ」)	「曖昧한」 (「曖昧하다」)
		[<i>aimai-na</i>]([<i>aimai-da</i>])	[<i>eme-han</i>]([<i>eme-hada</i>])
		名詞	名詞・動詞
	「参考」	「参考にする」	「参考하다」
		[<i>sannkoni-suru</i>]	[<i>chamgo-hada</i>]
態		- <i>suru</i> が付加され, 動詞	- <i>hada</i> が付加され, 動詞
	「安定」	「安定する」 [<i>anntei-suru</i>]	「安定하다」 [<i>anjeong-hada</i>]
		- <i>sareru</i> の付加不可	- <i>deoda</i> の付加可
		「*安定される」 は不可	「安定되다」 [<i>anjeong-doeda</i>]
[]は, 漢字語の音読. ()は, 辞書形.			

以上のように, 日韓両言語においては, 二字漢字語に関連する問題としてずれが生じる部分をまとめると, 以下の二点に着目することができる。一点目は, 両言語間の二字漢字語における品詞のずれによる相違点である。即ち, 二字漢字語が動詞化されるか形容詞化されるか, または名詞であるのかによって語尾の形態が異なるという点である。二点目は, 同様に動詞であるが, 二字漢字語が能動態として使われるか, 受動態として使われるかという態の問題である。前者が日本語では-*suru* に当たり, 韓国語では-*hada* に相当する。後者は日本語では-*sareru* に当たり, 韓国語では-*doeda* に相当する。これらの「品詞の相違」や「能動・受動による態の問題」による両言語間の相違点は, 韓国人日本語学習者にとって二字漢字語の使い分けに混乱が生じる部分である。

3. 先行研究

3.1 二字漢字語の品詞性

3.1.1 動詞性の漢字語

『日本文法大辞典』(2001:380)では, 「する」は主体が意志的または無意志的に, ある

行為・作用を行ったり、ある状態になっていたりを広くさす、日本語の最も基本的な一語であると記述されている。ここでは、用法として、i 単独用法、ii 代動詞、iii 「A する」の形の複合動詞となる場合があると記載されている。また、ここでiiiの「A する」に対しては、「A」には名詞に限らず、動詞および形容詞、連用形などを付加することが可能であると記載されている。このように多様な役割を持っている「A する」という形式で「する」の前に位置する「A」が二字漢字語である場合は、韓国語とは高い類似性が見られる。例えば、「食事」「運動」「出発」などの二字漢字語に*-suru*を付加し、「食事する」「運動する」「出発する」となり、動詞として使われる。このように二字漢字語の名詞に叙述の語尾が付き、動詞として使われる形式は韓国語にも同様である。韓国語にも*-suru*に該当する*-hada*という語がある。*-suru*と同様に様々な役割を果たすが、そのうち、役割の一つとして二字漢字語の後に付いて、「식사(食事)하다[siksa-hada]」「운동(運動)하다[undong-hada]」「출발(出発)하다[chulbal-hada]」のように動詞として使用される場合がある。しかしながら、常に*-suru*と*-hada*が対応するわけではない。上述したように両言語において同様の二字漢字語でも後続する語尾に「ずれ」がある語が存在する。以下例(1)のように、「矛盾」「汚染」をみると、動詞になるには日本語では*-suru*が付加される。両言語の対応関係だと韓国語でも*-hada*が付加されるべきであるが、韓国語では*-hada*ではなく*-doeda*が付加されるのが自然でありよく使われる。(:'は、日韓対応関係を示す)

(1) 矛盾 *suru* : 矛盾 *doeda* (*矛盾 *hada*)

韓国語の*-hada*の受動態である*-doeda*は、日本語の*-sareru*に該当する。そのため、韓国人日本語学習者に「矛盾 *sareru*」の使用や「汚染 *suru*」を使うところを「汚染 *sareru*」を使ってしまうなどの誤用がみられる傾向がある。このような誤用は、韓国人日本語学習者も二字漢字語が動詞として使われることは認識していながらも、両言語に語尾の形態のずれがあるということを意識せず使用してしまい誤用が起きている場合である。(1)のような両言語の「ずれ」は、日本語の*-suru*と*-sareru*との関係と韓国語の*-hada*と*-doeda*との使い分けの関係にあると考えられる。生越(1982)では、二字漢字語を取り上げ、日本語の能動と受動を韓国語のそれらと比較検討し、その結果として次のように述べている。日本語のスル形・サレル形の区別は、主語に対する積極的な働

きかけの有無により、韓国語の *-hata* 形・*toeda* 形²の区別は、基本的には主語が動作性を持っているときは *hata* 形、動作性を持っていないときは *toeda* 形が用いられる。即ち、韓国語の能動態や受動態の使い分けは、主語の働きかけによって異なり、この働きかけ性は、漢字語の意味に関わるものであると考えられる。つまり、(1)のように常に *-doeda* の方が自然な場合も存在し、文脈によって *-hata* より *-doeda* の方がより自然な場合があるのは、漢字語の意味自体が主体の動作から起こることではないということが言えよう。

3.1.2 形容詞性の漢字語

日本語では、状態を表す語として形容詞・形容動詞の二類がある。形容動詞を一品詞として認めるかはいまだ議論の交わされている問題であるが、日本の学校文法で広く普及しており、一品詞とされている(柏谷,1973)。形容動詞は、形容詞と意味面では同類であるが、名詞と同じ語尾が付き、活用も形容詞とは違い *-da* が付加する。例えば、「曖昧」「健康」などの名詞に *-da* が付加した形で「曖昧 *da*」「健康 *da*」のようになる。ただし、これらの形容動詞は後続する名詞を修飾する際は、*-da* が *-na* に変わり、「曖昧 *na*」「健康 *na*」のように語尾が変形して形容詞のような役割を果たしている。このように二字漢字語に、ある特定の語尾を付加し形容詞として使われることは韓国語でも同様である。

(2)	日本語	韓国語
	曖昧 <i>da</i> [曖昧 <i>na</i> + 名詞]	曖昧 <i>hada</i> [曖昧 <i>han</i> + 名詞]
	健康 <i>da</i> [健康 <i>na</i> + 名詞]	健康 <i>hada</i> [健康 <i>han</i> + 名詞]

ただし、韓国語では形容詞になる語尾が、動詞のそれと同形の *-hada* である。その対応関係は(2)のようである(‘:’は、日韓対応関係を表し、‘[]’は、後続する名詞を修飾する際の形態である)。以上のように両言語同様に二字漢字語の名詞に後続するのは、日本語では *-na* が、韓国語では *-hada* であり(テンスが現在を表す場合、名詞を修飾する際は *-han* になり動詞との区別有り)、形容詞として使われている。このように韓国語は語尾だけでは動詞なのか形容詞なのか区別ができない(梅田,1982)。ゆえに、韓国人日本語学習者によくみられる誤用は、日本語の形容動詞の語尾として *-na* を付加すべ

² 生越(1982)での、*-hada* と *-doeda* の表記。

き漢字語に^{-suru}を付けて使う誤用が起きてしまうことである。これらの問題が日韓両言語の漢字語にかかわる品詞の「ずれ」が生じるところである。

3.1.3 「-的」が付加される漢字語

以上では二字漢字語の品詞について述べてきたが、二字漢字語に特定の語尾が付き述語として使われたり、様々な接辞がそれらの直後に付くことで生産的に使われたりといった特徴がある。宮岡他(2006)では、両言語共通の接頭及び接尾の各々12個の字について調べている。本研究では、これら24個の接辞のうち、接尾として使われる12個の字の中で「-的」について検討する。日本語において「-的」は、英語の形容詞の翻訳として使われ始め、名詞の後に付いて<その性格を表す><それに関連して><その状態になって>という意味を持つ。「平和的」「比較的」「全国的」「一般的」などのように使われ、使用頻度の高い接尾辞である。韓国語においては、菅野(1981)の『朝鮮語の入門』で、「-的:-적[*jeog*]」という単語は体言的に用いられるが、主語としてではなく格語尾がつかない点などが日本語のいわゆる形容動詞と似ている、と述べられている。例えば、「平和的: 평화적[*pyeonghwajeog*]」「平和的だ: 평화적이다[*pyeonghwajeogida*]」「平和的に: 평화적으로[*pyeonghwajeogeuro*]」「平和的な: 평화적인[*pyeonghwajeogin*]」のように名詞的な結合形を持ち、形容詞的な意味特性を持って使われている(‘:’は、日韓対応)。これは日韓両方に同様な形態であり意味的な特性も同じであることが分かる。そのため、韓国語を日本語に直訳して使われることが多くある。韓国の辞書の『標準大國語辞典』の記述では、「-的」は、(1)その性格を表している、(2)それに関連している、(3)その状態になっている、という意味を持った派生語だとされている(訳は、筆者)。例えば、日本語と同じく「音楽的: 음악적[*eumakjeog*]」「医学的: 의학적[*uihakjeog*]」のように使われている。また日本語では使われていないが、韓国語では「予防的(예방적[*yebandjeog*])」「脱線的(탈선적[*talseonjeog*])」などのように使うこともできる(括弧の表記は韓国語の音読)。このように、「-的」が韓国語内に受容され、韓国語内の語彙化過程を経て、韓国語独自の語彙として定着している。例えば、「予防的」は、<前もって対処したり防ぐためにいたりすること>を意味し、「予防的」「예방적으로」「예방적인」のように使うことができる。以上のように、形容詞的な性質を表す意味として日常でも頻繁に使われている点においては日韓で同様であるが、使用範囲の漢字語にずれがある語が少なくない。宮岡他(2006)では、両言語において接辞と漢字二字熟語の結合の仕方がかなり類似して

いることを示唆している。しかし、同じ漢字語でも韓国語では付加して使われるが、日本語では付加しない語があるという「ずれ」があることは示していない。そこで、「-的」付加の客観的な記述の判定のために、韓国語は『標準国語大辞典』で、日本語は『明鏡国語辞典』を利用し、見出し語として掲載されている漢字語のみを集計し、両言語間のずれを検討した。

3.2 日韓漢字語における品詞性による相違

日本語における名詞の二字漢字語に、*-da* が付加される場合は形容動詞であり、*-suru* が付加される場合は動詞である。一方韓国語では、形容詞も動詞も基本形(辞書形とも言われる)が同様に*-hada* が付加される。このように、両言語で品詞によって語尾が異なることは述べてきたとおりであるが、両言語における品詞が異なる場合もある。具体的に言えば、日本語では動詞であるが韓国語では形容詞である場合(「一定」「徹底」など)と、その逆の場合(「不平」「強引」など)もある。上述した「参考」がそれに当てはまり、日本語では名詞のみで使われ、韓国語では名詞と動詞として使われている。このように同形の漢字語に関して品詞が異なることは、両言語において意味や使い分けに違いがあることが考えられる。

李(2002)では、漢字語の品詞性は漢字語が持つ意味によって大きく影響を受けるのであり、漢字語の意味は品詞性と密接に関係していると述べている。また、特に、日本語と韓国語の対照に当たっては、漢字語の異同によって品詞性に「ずれ」が生じることになることも述べている。さらに、日韓二字漢字語を品詞別に分類し、日本語と韓国語を並べ替えたものをデータベース化した。漢字語の品詞性については、辞書によって「ずれ」が生じた語に対する品詞の判定の際、判定基準が多少主観的であったことと、品詞性の「ずれ」の背景や要因をより明確にすべきであると述べている。しかし、日韓漢字語の品詞の「ずれ」に関して言及はなく、さらに複数の品詞を兼ねている漢字語について大略的に扱っているため、動詞と形容詞を兼ねている漢字語については「奔走」一語しか言及されていない。

上述したように、両言語で語尾のずれによって、韓国人日本語学習者は、《*-hada* は*-suru* で訳す》と覚えてしまい、*-na* が付くはずの「曖昧」にも*-suru* を付けてしまい「*曖昧する」という誤用が起きる可能性がある。また、日本語では名詞として使われるが韓国語では*-hada* を付加し動詞として使われる語「参考」、日本語では*-suru* を付加して動詞として使われることができる語でも韓国語では名詞のみで使われる語「影響」など

が見られる。

3.3 日韓自他動詞の語尾形態の相違

梅田(1982)では、韓国語と日本語間の漢字語の類似性や相違性について言及している。日本語は*-suru*を付ければ動詞になるという性質を持つが、韓国語の場合は、動詞および形容詞はどちらも「漢語+*-ha*」と形態上は同じであるために、形態的手がかりだけでは区別ができないと述べている。また、生越(1982)では、韓国語母語話者が日本語を学ぶ際、ボイスの問題として能動形と受動形の使い分けは習得されにくいと指摘している。それは、漢語に付加する*-hada*(能動形)と*-doeda*(受動態)と、日本語の*-suru*(能動形)と*-sareru*(受動形)との使い分けに「ずれ」があるからである。図1は、日本語の*-suru*と*-sareru*に対し、韓国語の*-hada*と*-doeda*がどのように対応するのかを示したものである。*-hada*と*-doeda*をそれぞれ能動形と受動形として捉えているが、*-hada*を他動詞として*-doeda*を自動詞として捉える立場もある。

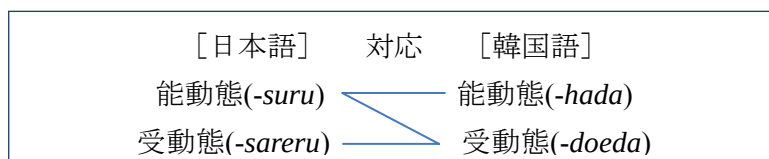


図1 日韓自他動詞の語尾対応関係(生越 1982)

しかし、韓国語の場合に、同じ文の構造において、能動態(*-hada*が後続)でも受動態(*-doeda*が後続)でも成立する漢字語がある。それは、他動詞と自動詞という概念よりは、能動態や受動態を念頭においた立場から日本語と韓国語を対照し検討すべきだと考えられる。

4. 研究方法 -日韓漢字語基本資料の作成を基づいて-

本研究では、基本データとして、旧『日本語能力試験出題基準』(2007, 改定版)を用いた(以下、『旧試験』)。本研究の調査では、『旧試験』の語彙から二字からなる漢字語を全て抽出し、韓国の辞書を用い、韓国語に存在する漢字語のみを対象にした。二字漢字語の情報の調査は、品詞や活用形情報が得られるものとして両国の国語辞

書を用いて行った³。

4.1 調査対象語の抽出手順

本研究で対象となる漢字語を選定するためにまず、『旧試験』から4, 3, 2級までの語のうち、二字からなる漢字語を全て抽出した(2,060 語)。これらの 2,060 語を韓国内の国語辞典を参照し、見出し語として存在しない漢字語は除外した。その結果、2,060 語のうち 1,872 語が見出し語として掲載されていた。本研究では、これらの 1,872 語を基本データとして取り扱うことにする。

本研究でのデータベースは、日本と韓国の国語辞書を利用し、掲載されている漢字語の情報をデータ化したものである。具体的な調査項目は、一語の見出し語に対して日本語では*-suru* の付加、*-na* の付加、*-的*の付加を調べ、韓国語では*-hada* の付加、*-doeda* の付加、「*-的*」の付加を調査した。

表 3 日本語と韓国語の二字漢字語の品詞入力例

No	漢字 表記	日本語					韓国語					
		読み	~ <i>suru</i> (V)	~ <i>na</i> (A)	~的	品詞	読み	~ <i>hada</i> (V)	~ <i>doeda</i> (V)	~ <i>hada</i> (A)	~的	品詞
1	問題	もんだい	0	0	0	名	문제	0	0	0	0	名
2	関係	かんけい	1	0	0	名・自サ変	관계	1	1	0	0	名
3	経済	けいざい	1	0	1	名・形動	경제	1	0	0	1	名
4	必要	ひつよう	0	1	1	形動・名	필요	0	0	1	0	形・名
5	日本	にほん	0	0	1	名	일본	0	0	0	0	名
6	女性	じょせい	0	0	1	名	여성	0	0	0	1	名
7	計画	けいかく	1	0	1	名・他サ変	계획	1	1	0	1	名
8	予定	よてい	1	0	0	名・他サ変	예정	1	1	0	0	名
9	発表	はっぴよう	1	0	0	名・他サ変	발표	1	1	0	0	名
10	不安	ふあん	0	1	0	形動・名	불안	0	0	1	0	形・名
11	代表	だいひょう	1	0	1	名・他サ変	대표	1	0	0	1	名
12	年度	ねんど	0	0	0	名	연도	0	0	0	0	名
13	国民	こくみん	0	0	1	名	국민	0	0	0	1	名

³ 日本語は、サ変動詞の情報記述が辞書によって異なるため、『大辞林』(第3版)、『岩波国語辞典』(第7版)、『新明解国語辞典』(第4版)の三つの辞書を調べた。韓国語は、韓国の国立国語院から出された『標準国語大辞典』(2002)を利用した。

このように日本語の漢字語の情報と韓国語のそれとには若干の違いが存在する。具体的に、日本語の場合は、自他動詞の情報があり、*-suru* が付加された場合に自動詞か他動詞かの情報があるためそれを反映した。一方韓国語の場合は、自他動詞の情報はなく、*-hada* が付加された形が動詞か形容詞かの品詞の情報があり、上述したように*-doeda* が付加される場合は掲載されてあるため、それを反映した。入力方法は、付加可能であれば1を、付加不可能であれば0を記入した。上の表3は、ランダムで例を挙げたものである。(但し、「経済」に*-suru* が付いた場合は、＜国を治め、民を救済すること＞という意味として記載されている。)

4.2 日韓二字漢字語の集計結果

4.2.1 品詞別の語数集計結果

4.2.1.1 日韓共通する二字漢字 1,872 語のカウントの結果

二字漢字 2,060 語のうち韓国語にも存在している 1,872 語から、二字漢字語の占有率が両言語においていかなる違いがあるのかを調べるために語数をカウントした結果、表4のような比率が出た。ただし、韓国語の*-hada* は動詞、形容詞両方に付くため、品詞別の集計においては分けて集計を行った結果、日本語で*-suru* が付加されて動詞として使われる語は合計 609 語であった。一方韓国語は、*-hada* が付き動詞として使われる語が 631 語であった。これを級別に分け占有率を表4に示した。表4のように、日本語も韓国語も3級から2級に上がるにつれ語数が急増した。品詞別にみると、動詞の語数は日韓でほとんど同じ(日本語;15 語, 72 語, 522 語／韓国語;18 語, 70 語, 547 語)である。形容詞の場合は2級の語彙はほぼ同じであるが、4級と3級は日本語の方が韓国語より多かった(日本語;12 語, 21 語, 138 語／韓国語;4 語, 11 語, 114 語)。

表 4 日韓の動詞および形容詞の比率

日韓同形語		Verb		Adjective
4級	145 語	J	15 語(0.8%)	12 語 (0.6%)
		K	18 語(1.0%)	4 語 (0.2%)
3級	187 語	J	72 語(3.8%)	21 語 (1.1%)
		K	70 語(3.7%)	11 語(0.5%)
2級	1,540 語	J	522 語(27.9%)	138 語(7.4%)
		K	547 語(29.2%)	114 語 (6.1%)

< K:韓国語／J:日本語, 総語1,872語 >

4.2.1.2. 語尾項目別の語数の結果

両言語に現れる語尾による漢字語の語数をクロス集計した(表5を参照)。一つの漢字語に対し一つの語尾, または複数の語尾を付加することが可能であるため, クロス集計表を利用した。また, 単独語数(一つのみの語尾が付加する語)が分かり, その重複している語の数も確認できた。具体的には, 日本語では「-*suru*」「-*na*」「-的」が付加される語数を集計した。単独語数をカウントし, 一つの語尾が付加される語はどれくらい存在するのかを調べ, 韓国語では「-*hada*(動詞/形容詞)」「-*doeda*」「-的」「単独語数」を調べた。

表 5 日本語と韓国語のクロス集計表

＜ 日本語 ＞					＜ 韓国語 ＞					
4級	V(- <i>suru</i>)	A(- <i>na</i>)	～的	単独語数	4級	V(- <i>hada</i>)	V(- <i>doeda</i>)	A(- <i>hada</i>)	～的	単独語数
V(- <i>suru</i>)	15	1	0	14	V(- <i>hada</i>)	18	5	0	0	13
A(- <i>na</i>)	1	12	0	11	V(- <i>doeda</i>)	5	5	0	0	0
～的	0	0	2	2	A(- <i>hada</i>)	0	0	4	0	4
3級	V(- <i>suru</i>)	A(- <i>na</i>)	～的	単独語数	～的	0	0	0	6	6
V(- <i>suru</i>)	72	7	7	58	3級	V(- <i>hada</i>)	V(- <i>doeda</i>)	A(- <i>hada</i>)	～的	単独語数
A(- <i>na</i>)	7	21	1	13	V(- <i>hada</i>)	70	27	1	11	35
～的	7	1	25	17	V(- <i>doeda</i>)	27	27	0	4	0
2級	V(- <i>suru</i>)	A(- <i>na</i>)	～的	単独語数	A(- <i>hada</i>)	1	0	11	0	10
V(- <i>suru</i>)	522	18	47	457	～的	11	4	0	36	25
A(- <i>na</i>)	18	138	7	113	2級	V(- <i>hada</i>)	V(- <i>doeda</i>)	A(- <i>hada</i>)	～的	単独語数
～的	47	7	130	76	V(- <i>hada</i>)	543	287	8	94	210
全体	V(- <i>suru</i>)	A(- <i>na</i>)	～的	単独語数	V(- <i>doeda</i>)	287	291	5	53	1
V(- <i>suru</i>)	609	26	54	529	A(- <i>hada</i>)	8	5	114	9	97
A(- <i>na</i>)	26	171	8	137	～的	94	53	9	221	119
～的	54	8	157	95	全体	V(- <i>hada</i>)	V(- <i>doeda</i>)	A(- <i>hada</i>)	～的	単独語数
					V(- <i>hada</i>)	631	319	9	105	258
					V(- <i>doeda</i>)	319	323	5	57	1
					A(- <i>hada</i>)	9	5	129	9	111
					～的	105	57	9	263	150

＜ V:動詞 / A:形容詞, 単位:語数 ＞

表5のクロス集計表は, 該当する語尾の付加が可能な語を集計したものである。＜ 日本語 ＞の[全体]から確認できるように, -*suru* が付加され動詞になる語は 609 語であり,

-*na* が付加され形容動詞として使われる語は 171 語である。また、接尾辞の「-的」が付加可能な語は 157 語である。但し、表5の集計表は、複数の語尾が付加される語も含まれている。例えば、-*suru* と-*na* の付加が可能な語や「-的」と-*na* の付加が可能な語などすべて含まれているため、各カテゴリーの単独語数も集計した。つまり、形容動詞の要素は持たず「-的」も付けられない動詞の語数は 529 語であり、動詞の要素も形容詞の要素も持たず単独で「-的」のみが付加する語が 95 語であった。

[全体]の語数と2級の語数を比べるとほとんど差はないが、3, 4級に比べ2級の語数が非常に多いことが分かる。これは日本語だけではなく韓国語も同様であった。

まず<日本語>では、動詞は 609 語で形容詞は 171 語である。この中に動詞と形容詞の両方を持っている漢字語は 26 語で、これらの 26 語には-*suru* も-*na* も付加されるため、品詞による意味の拡張が許されることを学習者は認識する必要があると考えられる。単独語数は、3級は 72 語のうち 58 語が単独で動詞になり(80.5%), 2級は 522 語のうち 457 語が単独で動詞になる(87.5%)。[全体]での動詞の単独語数の割合は 86.8%(609 語のうち 529 語)であり、レベルが上がるにつれ、-*suru* が付加される二字漢字語の確率が非常に高くなるという結果であった。また「-的」が付加される語は 157 語で、54 語が動詞として、8語が形容詞として、95 語が名詞として使われる語である。形容詞は8語であるが、使用頻度を考えると「-的」が付き「二字漢字語+的」の形態でよく使われるのは「一般」「健康」「自然」「絶対」というわずか4語である。これ以外の4語は、「垂直的関係」「必要的記載事項」「水平的思考」「平和的解決」のように「-的」が付き合成語として使われている。このように、「-的」が付くとはいえ、全て同様に使われているわけではなく、直後に名詞が付加して使われる漢字語も存在している。

一方<韓国語>の場合は、動詞は-*hada*と-*doeda*を分けて集計しているが、-*hada*が付加される語と-*doeda*が付加される語は1語を除いて全て重なっている。動詞は 631 語で形容詞は 129 語である。この中に動詞と形容詞の両方を持っている漢字語は、-*hada* が付く動詞は9語で-*doeda* が付く語は5語である。これらのうち、3語が-*hada* と-*doeda* の両方が付き、韓国語では 11 語が動詞と形容詞の両方で使われている。日本語で 26 語に-*suru* と-*na* が付加されるのに比べ語数が少ないことを考えると、日本語の漢字語に含まれている意味を反映している品詞の範囲がやや広いのではないかと考えられる。単独語数は、3級は 70 語のうち 35 語が単独で動詞になり(50.0%), 2級の場合 542 語のうち形容詞と「-的」付加語を除いた 443 語⁴が単独で動詞になる(81.1%)。

⁴ -*hada* の単独語数(210 語)と-*doeda* の単独語数(1 語)に-*hada* と-*doeda* の両方が付く語数 232 語を

「-的」が付加される語は 263 語で、動詞が 105 語、形容詞は9語、名詞は 150 語であった。また「-的」の付加が可能な語は、4級は6語、3級は 36 語、2級では 221 語が抽出された。「-的」が単独で付加される語とは、名詞であるということで、4級は6語全てが名詞のみで使われ、3級では 36 語のうち 11 語は動詞として使われ 25 語が名詞として使われる。また2級では、221 語のうち 119 語が名詞として使われている。

また、4級の動詞の場合は、18 語のうち5語は *-hada* と *-doeda* を併用している語であり、*-doeda* の単独では使われていない。このように *-hada* と *-doeda* が併用する語は、4級は 5語(動詞の 18 語のうち 27.8%)、3級は 27 語(動詞の 70 語のうち 38.6%)であるが、2級では 287 語(動詞の 547 語のうち 52.7%)になり急増したことが分かった。これらのことからレベルが上がることにより学習者の能動態と受動態の使い分けの負担が大きくなることが予測できる。

表5で<日本語>と<韓国語>の[全体]を比べると、動詞は韓国語の方が 22 語多いことが分かる。つまり、韓国人学習者はこの日韓同様の 22 語の二字漢字語に対して、*-suru* を付けてしまう傾向があると考えられる。形容詞は日本語の方が 171 語で韓国語(129 語)より 42 語多いことが分かる。この 171 語のうち動詞と併用する語は 26 語で、この中でも韓国語でも同様に動詞と形容詞を併用する語は2語(「無理」、「満足」)であった。また、「-的」付加の場合、韓国語では 263 語に「-的」の付加が可能で、日本語は 157 語に付加可能であり、韓国語の方が 106 語多かった。これで「-的」の付加に関しては両言語の語数の差が非常に大きいことが分かった。特に、日本語では付加できないが韓国語で可能な語が 129 語で、日本語では付加が可能であるが韓国語では不可能な語は 23 語であった。

4.3 日韓両言語における品詞が相違する二字漢字語

4.3.1 語尾にずれがある語

日本語と韓国語における同形語でも、品詞が必ずしも一致するわけではない。表6は、日韓漢字語を品詞別に分類して語数を集計したものである。まず①は両言語とも動詞として韓国語には *-hada* が日本語には *-suru* が付加する。ただ、*-hada* ではなく *-doeda* のみが付加する「損害」は含まれていないため、両方とも動詞を表す場合は、557 語になり最も多くの割合を占めている。

合計したものである。

表 6 日韓漢字語間の相違する内容による語の集計

日韓漢字語の対照	
① 両方、動詞として-hadaや-suruが付く語	556 語
〔両方、動詞である漢字語(-hadaは付加せず-doedaが付加する1語が加わる)〕	557 語
② 日本語では動詞であるが、韓国語では名詞である語	36 語
③ 日本語では名詞(あるいは副詞)であるが、韓国語では動詞である語	66 語
④ 日韓ともに、形容詞である語	93 語
⑤ 同形語で、韓国語では動詞、日本語では形容詞	6 語
⑥ 同形語で、日本語では動詞、韓国語では形容詞	5 語

一方、②と③は日本語と韓国語の動詞や名詞の条件がクロスされた場合である。つまり、②の漢字語は-suru を付加し動詞として使われるが、韓国語では-hada は付加せず名詞として使われる語である。一方③の漢字語は-suru も-na も付加せず名詞として使われる漢字語で、韓国語では-hada を付け動詞として使われる語である。④は日韓両言語ともに同じ形容詞であるが、語尾形式の「ずれ」を、韓国人日本語学習者に認識させる必要がある。つまり、日韓両言語の品詞と語尾の「ずれ」を明確にすることが必要であると考えられる。最後に⑤と⑥は、同形の漢字語において両言語の品詞が互いに動詞と形容詞が逆になっている語の数である。②と③に比べ、語数がわずかであり、同形語に限られるため、両言語間で品詞情報は異なる漢字語であることを念頭に置く必要がある漢字語であろう。つまり、韓国語では動詞として使い日本語では形容詞、または動詞として使われる一方、韓国語では形容詞として使われる語である。前者が「架空」「過剰」「懸命」「強引」「得意」「必死」の6語で、後者が「一定」「謙遜」「混雑」「徹底」「広々」の5語である。

4.3.2 韓国語に存在しない漢字語

本調査の対象とした二字漢字語 2,060 語のうち、日本語にあり韓国語には存在しない語は 188 語であった。これらの 188 語を、2種類の辞書で調べた結果、19 語に-suru

が付加され動詞として使われている。具体的には表7のとおりである。

表 7 日本語のみに存在する漢字語－動詞化が可能な漢字語(使用頻度順)

#	表記	日読み	~suru (V)	~na (A)	品詞	頻度	級
1	心配	しんぱい	1	1	名・他サ変・形動	22071	3
2	世話	せわ	1	0	名, 他サ変	5097	3
3	商売	しょうばい	1	0	名・ス他	4889	2
4	承知	しょうち	1	0	名・他サ変	4306	3
5	返事	へんじ	1	0	名・自サ変	4173	3
6	味方	みかた	1	0	名, 自サ変	2123	2
7	喧嘩	けんか	1	0	名・自サ変	2090	3
8	真似	まね	1	0	名, 自他サ変	1786	2
9	見物	けんぶつ	1	0	名・他サ変	1188	3
10	合図	あいず	1	0	名・自他サ変	884	2
11	作製	さくせい	1	0	名・他サ変	766	2
12	泥棒	どろぼう	1	0	名・他サ変	758	3
13	支度	したく	1	0	名・他サ変	751	3
14	油断	ゆだん	1	0	名・自サ変	738	2
15	両替	りょうがえ	1	0	名・他サ変	638	2
16	退屈	たいくつ	1	1	名・自サ変・形動	525	2
17	挨拶	あいさつ	1	0	名, 自サ変	193	3
18	寝坊	ねぼう	1	1	名・形動・自サ変	52	3
19	頂戴	ちょうだい	1	0	名, 他サ変	44	2

以上のように 19 語のうち、「心配」「退屈」「寝坊」は形容動詞としても使われる。級別では、3級の語が 10 語で、2級が9語である。ここから、レベルが高くなるとはいえ、日本語独自の語彙が増えるというわけではないことが分かった。むしろ、今までの日韓同形の漢字語の調査の結果から2級で漢字語の割合が増え、-suru が付加される漢字語も同様に増えてきているように、日本語能力が上級になるにつれ、韓国人日本語学習者は、母語の影響で困難を感じる傾向が想定されと考えられる。

5. 調査の結果および考察 -日本語教育への提案-

本研究では、『旧試験』の2, 3, 4級の語彙から二字漢字語を対象とし、日韓両言語の類似点や相違点を、漢字語に付加される語尾の対照から計量的に検討し、これらの計量的な結果から両言語に存在するずれから分かる特徴を明らかにした。本稿で問題点として取り上げた(1)名詞が動詞化あるいは形容詞化(-*da*/-*hada*)する語で日韓ずれがある語、(2)日韓両言語ともに動詞でも、その漢字語が能動態(-*suru*/-*hada*)か受動態(-*sareru*/-*doeda*)かにより、日韓でずれが生じる語、(3)形容詞の性質を持つ接尾辞「-的」の付加のずれに関して、以下に、日本語学習者に有効な学習法を提案したい。

(1) 名詞が動詞化あるいは形容詞化(-*da*/-*hada*)する語で日韓ずれがある語がある。

これらのずれに関しては、まず両言語の動詞と形容詞の語尾の違いを認識させるのが重要であると考えられる。その上で、本調査対象語の 1,872 語のうち動詞が占めている割合は、日本語の 609 語(32.5%)と、韓国語の 631 語(33.7%)で、韓国語は日本語より22 語多く、形容詞の場合は日本語(171 語)の方が韓国語(129 語)より多かった。日本語では形容詞として使われるが韓国語では動詞とも形容詞ともならない 47 語に関しても言及し提示するのが望ましいと考えられる。一方、動詞と形容詞の両品詞を持っているものがあり、日本語は 26 語、韓国語は 11 語であった。韓国語の場合は、動詞になる語として-*hada*(9語)と-*doeda*(5語)が付加する語のうち形容詞とは3語が重なるため、動詞になる語と形容詞になる語は 11 語である。このように同様の漢字語において品詞が異なるということは、両言語において意味の領域や使い分けが相違するということである。そこに注意を払わせることによって両言語が相違することを認識されることができよう。

(2) 日韓両言語ともに動詞でも、その漢字語が能動態(-*suru*/-*hada*)か受動態(-*sareru*/-*doeda*)かにより、日韓でずれが生じる語がある。

態の問題においては、本調査で行ったのは韓国語の態のみである。韓国語の場合は、辞書に見出し語として-*doeda* が可能かどうか明示されているが、日本語の場合は、-*sareru* については辞書では言及されていない。そのため、本調査では韓国語のみ受動態を調査し、割合を検討した。両言語を直接対照はできないが、韓国語内での割合を検討すると、319 語(-*hada* が可能な語のうち 50.6%)が能動態・受動態が可能である。

ただし、韓国語の態の使用においては、文による使用程度は異なるため、能動態より受動態の方がより自然に使われる漢字語もある。このような漢字語に関しては、韓国語で自然な受動態の語が日本語ではどのように対応するのかをまず認識しておくべきだと考えられる。

(3) 形容詞の性質を持つ接尾辞「-的」の付加に日韓間ずれがある。

「-的」付加のずれに関しては、両言語を各々集計した語数だけで 106 語の差があることから両言語の形態的な相違が明確であるということを認識させる。また、韓国語では付加しない 23 語もあるが、日本語では付加されない 129 語の方を提示し、これらの語に関しては「-的」が付かないことを提示することが有効であろう。特に、「-的」の使用に関しては両言語間に使い分けの違いが存在することも認識させることが望ましい。

その他に、本調査から分かったことのうち、次の2点を提案する。まず1点目は、両言語において同形の漢字語でありながら品詞に「ずれ」がある語(表6の②と③)や両言語で品詞が逆である語(表6の⑤と⑥)が存在していることを認識させる。ただし、⑤の場合は「過剰」「懸命」「得意」「元々」、⑥の場合は「広々」が、韓国語の辞典に記載されているだけであり、日常ではほとんど使われていないため、日本語独特の漢字語としての指導方法がより有効であると考えられる。次に2点目は、日本語ではあるが韓国語では存在しない語を把握させることである。日本語には存在し韓国語にはない漢字語(表7)の 188 語のうち、19 語に *-suru* が付加可能であり、「心配」「退屈」「寝坊」は形容動詞としても使用される。漢字語の級別の割合をみると、日韓両言語に存在する語は2級で急増したのに比べ、この 19 語では3級より2級の語が1語少なかった。つまり、3級のレベルの漢字語が半数以上(10 語)を占めていることから、韓国語と対応していない二字漢字語の場合は、推測が不可能な初級でも早い時期から導入し繰り返しの学習が有効ではないかと考えられる。

本調査から、日韓二字漢字語の語尾の割合は対照できたが、日常での使用頻度は考慮していないため、韓国語に存在していても実際に韓国語母語話者にいかに認識されているのかは明確ではない。特に、教える側として指導する際は使用頻度を考慮することが重要だと考えられる。

6. おわりに

本研究では、日韓両言語に共通した1,872語の二字漢字語のうち、日韓二字漢字語がいかに類似し、相違しているのかを計量的に検討した。これらの漢字語に語尾が付き述語として使用されるという類似点を基に、同様の語尾でも品詞が異なる語や、同様の品詞でありつつも能動や受動のような「ずれ」がある語を抽出し、両言語における品詞特徴を検討した。今回の調査で日韓漢字語に付加される語尾にどのような相違点があるのかを検討したが、本調査の対象語である1,872語の中には、現代韓国語では使用頻度が非常に低い語がややみられた。より有効な使い方や語彙的比較を行うためには、日常的に使用される高使用頻度の漢字語を対象とし、使用する場面においてはどのような使い分けがなされているのかを検討するという課題が残っている。

〔参考文献〕

- 李于錫(2002).『韓日漢字語の品詞性に対する対照研究-二字漢字語の品詞性-』ソウル:J&S.
- 池上禎造(1984).『漢語研究の構想』pp.69-pp.87, 東京:岩波書店.
- 永澤済(2007).「漢語動詞の自他体系の近代から現代への変化」『日本語の研究』3(4):17-32,東京:日本語学会.
- 梅田博之(1982).「韓国語と日本語—対照研究の問題点」『日本語教育』48:31-42, 東京:日本語教育学会.
- 梅田博之(1979).「朝鮮語を母語とする学習者のための日本語教材作成上の問題点」『日本語教育』40,35-46. 東京:日本語教育学会.
- 生越直樹(1982).「日本語漢語動詞における能動と受動--朝鮮語 hata 動詞との対照」『日本語教育』48,53-65. 東京:日本語教育学会.
- 柏谷嘉弘(1973).「形容動詞の成立と展開」『品詞別日本文法講座4』鈴木 一彦, 林巨樹(編):明治書院.
- 菅野裕臣(1981).『朝鮮語の入門』東京:白水社.
- 松尾勇(2001).「接辞「-적(的)」について」『朝鮮学報』朝鮮学会.
- 宮岡弥生・玉岡賀津雄・林鉉情(2006).「接頭・接尾辞と漢字二字熟語との結合力に関する日韓」対照研究」『日本語学研究』第16輯,33-46. ソウル:韓国日本語学会.
- 山口明恵・秋本守英(編)(2001).『日本語文法大辞典』東京:明治書院.

韓先熙(2003).「漢語形容動詞の習得について—韓国人学習者を対象に—」『日本語学研究』第7輯,167-180. ソウル:韓国日本語学会.

노명희(2005).『현대국어 한자의 연구』소울:大学社.

이운영(2002).『표준국어대사전』연구분석』국립국어연구원.

Yokosawa, Kazuhiko and Michio Umeda (1988). *Processes in human Kanji-word recognition*. Proceedings of the 1988 IEEE international conference on systems, man, and cybernetics (August 8-12, 1988, Beijing and Shenyang, China), 377-380.

[参照資料]

金田一京助・柴田武・山田明雄・山田忠雄(1991).『新明解国語辞典』(第4版). 1972年初版. 三省堂

国立国語院(2002).『標準国語大辞典』東亜出版

国際交流基金(2007).『日本語能力試験出題基準』改訂版, 東京:日本国際教育協

西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫(編)(2009).『岩波国語辞典』(第7版). 1963年初版. 岩波書店

松浦明(編)(2006).『大辞林』(第3版). 1998年初版. 三省堂

朴 善嫻・名古屋大学国際言語文化研究科大学院生